

セクターで協力しながら描きはじめています。

■循環研が描く未来

生ごみを捨てずに資源として活用する社会、生ごみは焼却されることなく、資源として取り扱われ、コンポスト化、飼料化として半径2km圏内もしくは近郊地域で活用される、循環野菜が嗜好され、街角で買うことができる街を、循環研は目指しています。



写真4 生ごみ資源化100研究会

第26回研究発表会

食品ロスと子どもの貧困

NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン 理事長 はらだ まさき 原田 昌樹

NPO法人 フードバンク北九州ライフアゲイン代表の原田昌樹と申します。

私たちのミッションとビジョンをお伝えすることから始めたいと思います。

ミッション

「将来、子どもたちが、われわれの事業を通して、環境に左右されず、社会を担える大人へと成長できるようサポートすること」

ビジョン

「フードバンク事業を通して、食べ物を大切に作る心を育てるとともに、貧困と孤立によって、食べられない、働けない、教育が受けられない人々をひとりも生み出さない、誰もが尊厳をもって『その人らしい』生活を営む事が出来る地域社会の実現」

がっている」…このスローガンは私の直面してきた体験から生まれた言葉です。私は今までファミリーサポートの働きをし、家庭に戻れない人々の支援をしてきました。その中で某企業のご好意により食料をいただくようになりました。その中で食品が大量に廃棄されている現実に出会い、まだ食べられる食品を廃棄する社会構造は、弱者を切り捨てる社会を映し出しているように思えたのです。



写真1 熊本地震の食料支援に向かうメンバー

「食べ物のいのちは人のいのちにつな



写真2 寄贈された食品の仕分けをするメンバー

5秒にひとり、尊い人間の命が飢餓で失われている地球。同じ地球で大量の食べ物は食べきれずに廃棄されています。わが国でも年間500～800万tonもの食べ物が品質に問題はないのに、諸事情で棄てられています。しかし一方で国民の格差は広がり、生活困窮者は増加し、ひとり親世帯においては50%以上が生活にゆとりのもてない相対的貧困世帯とされています。私たちはこの国が抱える食品ロスの問題と生活困窮者、特に将来を担う子どもの貧困問題を改善させ、貧困の連鎖を断ち切りたいと願っています。

私はフードバンク事業をその願いを行動に移す手段として2013年にスタートさせ、多くの方々支援により、翌年の10月にNPO法人の認証を受けることができました。

フードバンクは、品質や安全性に問題ない、すなわちまだ食べられるにもかかわらず、印字ミスや箱が壊れる、あるいは規格外として販売できない食品を企業や農家・個人などから寄贈していただき（写真2）、生活困窮者（ひとり親家庭、介護家庭、失業者、外国人労働者、路上生活者など）、児童養護施設、障がい者施設、依存症更生施設、女性シェルター、老人介護施設、里親家庭、ファミリーホームなどに無償で提供する活動です。

私たちは2016年度よりファミリーサポート事業を加え、フードバンク事業と両輪で事業を走らせる決断を取りました。それは、将来を担う子ども達への支援が食料支援に留まらず、孤立している親子にとって、その親子が心からほっとでき、子どもが育まれるもう一つのホーム、もう一つの家族が地域に必要なだと感じているからです（写真3）。

ぜひ私たちの活動を知ってもらい、人が大切にされる新しい循環型社会と一緒に創っていただけると願っています。関心をおもちの方は、次のHPをのぞいてみてください。

<http://fbkitaq.net/>



写真3 社会的家族の居場所を創造する